

がくせい

学生の取り組み

— 熊大生が主体となって行っている活動や取り組みをご紹介 —

01 紫熊祭(黒髪地区) 実行委員会の活動

紫熊祭とは、熊本大学黒髪地区で行われている学園祭です。紫熊祭実行委員会には環境部が設置されており、日頃から様々な環境配慮活動を行っています。

循環型スタイル

清掃活動



毎月第2土曜日と第4日曜日の月2回、朝10:00より熊大周辺と市街地周辺の清掃活動を実施しています。紫熊祭の期間中はライブや交通渋滞等で地域の皆様にご迷惑をお掛けすることが多々あります。そのため、紫熊祭以外の期間を地域への貢献に力を入れ、少しでも地域との関わりをより良いものにしようと努めています。毎年増加を続ける紫熊祭実行委員を総動員して行う大規模な活動です。

ZERO PROJECT

学生による熊大周辺のごみステーションの利用改善に取り組む企画です。毎月1回黒髪自治会・市役所・NPO法人CANPUSと紫熊祭実行委員とで実際に現地に赴き、どのような違反ごみがあるかを調査し、そのあとでワークショップを開いて違反ごみを無くすための解決策を考えています。美しい環境は見た目が良くなるというだけでなく、犯罪の抑制にもつながっています。これからは紫熊祭実行委員以外の一般学生も参加してもらい、身近な問題として考えてもらえるような取り組みも始めます。分別方法・決められた収集日をしっかり守り、環境美化を広げましょう。



リクラブの由来 (Reclub)



02 リクラブ (文化系公認サークル)

リクラブは1997年発足の環境ボランティアサークル(熊本大学文化部会所属の公認サークル)で、熊本大学の学部1・2年生を中心メンバーとして、環境関連活動を行っています。

循環型スタイル

各個人が興味を持ったことや「やりたい!」と思ったことについて、話し合いをし、活動を行っています。例えば、大学内のゴミ拾いを行ったり、町の清掃ボランティア団体企画に参加したり、紫熊祭ではテボジツ運動を行ったりなど様々な活動をしています。



こんにちは。熊本大学生協組織部です。組織部は現在、1年生34名、2年生33名の計67名で活動しています。(2017年度)組織部は、生協組合員の日々の生活がより良くなるよう活動している学生団体です。学生が主体となって、様々なイベントの企画、運営を行っています。毎週月曜日には部会を開催し、部員全員で組織部の活動について話し合っています。主な活動内容として、4月に新入生歓迎企画を行ったり、普段はショップと協力してイベントを開催したりしています。最近では、オープンキャンパスのスタッフとして活動しました。個性豊かな67人が日々楽しく、やる時はやる、というメリハリをモットーに活動しています。

03 生協組織部

生協組織部(通称まるそ)は生協の学生団体です。生協組合員の日々の生活がより良くなるよう、様々なイベントを企画・運営を行っています。

循環型スタイル



環境活動の一環として、リ・リパックの回収を行っています。リ・リパックとは、外側のフィルムを剥がして中のパックを再生利用するものです。ゴミ箱の付近に回収ボックスを設けています。設置前よりもリ・リパック回収率が上がり、設置の効果はあったと考えられます。また、ポスターも制作し、リ・リパックの認知度の向上にも務めています。

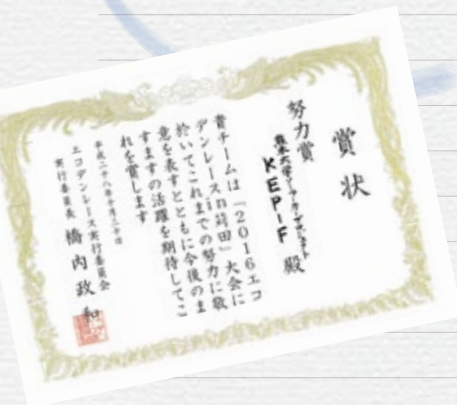
2016年度 04 熊大ソーラーカー プロジェクト活動報告

低炭素スタイル



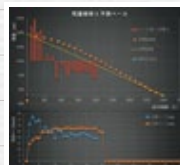
2016年度
ソーラーカーレース鈴鹿結果

ENJOY I/IIクラス 総合17位
ENJOY IIクラス 9位



開発中の乾電池車両の九州大会であるエコデンレース苅田では、初出場ながら努力賞を受賞しました。自分たちで作った車両が評価されるのは非常に嬉しいです。

電気自動車のレースではバッテリー残量の変化をもとに可能な走行距離を予測しながら走り方をコントロールするレースマネジメントが重要です。



新しく挑戦するEne-1GPLレースは単3電池で鈴鹿サーキットを走るため、設計した超小型電気自動車は航空機用新素材のCFRPを使ったボディーで製作中です。

私たち「ソーラーカープロジェクト」は、2013年度に発足した工学部公認サークルです。ソーラーカーをはじめとする電気自動車を自分たちで製作して、レースに参戦しています。

今年から新たにEne-1GPというタイムトライアル競技に参戦予定です。これは単3電池40本を使った超小型の車両で鈴鹿サーキット3周を走行し、そのタイムを競うもので、上位チームともなると最高時速は100km/hに達する非常にハイレベルなレースです。電気自動車は近年、環境への負荷の低さが見直されて一般に知られるようになったものの、まだ十分には普及していません。その一番の理由は1度の充電で走れる距離の短さと、その充電の煩わしさにあるだろうと思います。Ene-1GPでは市販されている充電式の単3電池を使うため、その限られたエネルギーをどのようにして効率よく利用できるかがレースの勝敗を左右します。私たちは未来のモビリティ開発への糸口をEne-1GPに見出し、思い切って新たな挑戦へと踏み出しました。

機械システム工学科 齋藤 慎之助